内容理解
文脈把握
語句
文法

国語

1

次の文章を読み、あとの(1)〜(6)の問いに答えよ。

1 小学校へ入ってからこのかた、われわれはものを覚えることにあけくれて来た——ある友人がしみじみそう述懐した。多少とも知識と関わりのある職業についている人なら同じような感慨をもつ人がすくなくないだろう。

2 ものを忘れてはいけない、というのは、ほとんど本能的な怖れになっている。学校とは、放って置けば忘れることをいかにして忘れないようにするか、の努力を競い合う場所である。記憶のよいものが優秀な成績をあげるのは当然である。

3 試験というのは、われわれの記憶装置をテストするために案出されたとしかいいようがない。教えられたことを忘れたであろう頃を見はからって、思い出してみよと命じるのが試験である。なるべく原形に近い再生をする必要があるから、直前に記憶しなおす一夜漬けがもっとも有効な準備になる。

4 思えば、これは人間の頭のずいぶん無駄な使い方である。昔はコンピュータがなかったから、いまならコンピュータに任される仕事でも人間がしなければならなかった。教育はそういう機能を持った人間コンピュータを養成する目的をもっていた。コンピュータが忘れたりしては台なしになる。絶えずテストして忘れないように見張っている必要があるというわけである。

5 ものを覚えるだけが能ではなく、それを基本にして考えるのが大切なはずなのに、天は二物を与えずではなく、二兎を追うのは賢明でないと考えたためであろうか、記憶第一主義が確立してしまった。機械が情報や知識を記憶、再生することなど夢にも考えられなかった時代なら、それでもいい。A現代のような状況では、当然のことながら、人間頭脳の訓練は違った目標に向けられるべきである。それなのに、相も変わらず、記憶一点張りがつづいている。それがおかしいとも思われないのだから、不思議である。

6 記憶は完全な原形の再生ではないはずだが、一般には、そう思われている。ものを食べてしばらくすると、食べたものは胃の中で消化が始まる。それをもどして見れば、おそらくもとの形はとどめていまい。原形そっくりが出てくるようだったら、その人間の胃は消化力がゼロという証拠である。知識についても似たことがいえよう。頭に入れたことがいつまでも変化しないでそのまま残っているようであったら、記憶力の優秀さを評価することよりも、消化力、理解力の微弱さを嘆かなくてはならない。

7 しかるに、世の中は、そういう微弱な消化力しか持たない頭を指して、頭がいい、などともてはやす。それで、猫も杓子も、忘れるな、記憶せよ、が合言葉になる。

8 そのつまり方が少しひどくなると、いろいろおもしろくない現象があらわれる。小さなことばかり覚えていて、かんじんな大局を見失う。精神が倦怠、不活発を訴える。はてはノイローゼ症状を呈する。[B]はじめてあわて出すのだが、C原因に忘却恐怖のあるのがよく分かっていないのはまことに困ったことだ。

9 自然の状態では下水道のパイプはそんなにしばしば詰まったりしないようになっている。詰まっては大変だから、そういう予防の措置を神様がちゃんとつくっておいてくれてある。

10 過ぎたるは及ばざるがごとし。ことごとに記憶を尊重するものだから、忘れたいことまで忘れDられなくなる。われわれの日常はじつに雑多な情報を受け入れて、その中から必要なものだけを選択し、残余はなるべく早くすてる、[E]、忘れる必要がある。多くは忘れるという意識もなく忘れる。忘却はいわば下水道みたいなもので、詰まったらことだ。忘れてはいけないとおそれている優等生のパイプは多少とも詰まっている。

11 睡眠である。眠りは肉体の疲れを休めるのはもちろんだが、頭の中の整理をする時間でもある。目を覚ましている間に入ってきたおびただしい情報、刺激が仕分けされて、当面不要なものは忘れるルートへ載せられる。

12 朝、目をさますと、頭がすっきりして爽快なのは整理すべきものがとりのぞかれているからで、つまり、本当に頭がよくなっているためである。睡眠は自然忘却の装置であるのに、忘却を怖れるあまり、知らず知らずのうちに、その装置を働かないようにしてしまっていることがすくなくない。

13 健康な人間なら、横になればいつしか眠りにつくものなのに、寝つきの悪い人間が多くなってくるのも、どこか不自然な力が頭に加わっているのではないかと思わせる。長寿者が申し合わせたように、くよくよしないことを長生きの秘訣にあげている。忘れることは本当に健康の条件なのである。

（外山滋比古「知的創造のヒント」による）

(1) 文章中の A 現代のような状況では、当然のことながら、人間頭脳の訓練は違った目標に向けられるべきである について、次の各問いに答えよ。

① 昔の人間頭脳の訓練の目標は、どのようなことだったのか。文章中のことばを用いて、**十五字以上、二十字以内**（句読点も字数に数える）で書け。

② 筆者が考える人間頭脳の訓練の目標は、どのようなことか。文章中のことばを用いて、**十五字以上、二十字以内**（句読点も字数に数える）で書け。

(2) 文章中の 8 ～ 10 段落は、順番が入れかわっている。正しい順番に並べかえたものを次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 9→8→10　**イ** 10→8→9　**ウ** 8→10→9　**エ** 9→10→8

(3) 文章中の B ・ E に入ることばの組み合わせとして最も適当なものを次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その記号を書け。

ア B＝そして　E＝なぜなら　**イ** B＝つまり　E＝例えば
ウ B＝すると　E＝もっとも　**エ** B＝そこで　E＝つまり

(4) 文章中の C 原因 の対義語を**漢字二字**で書け。

(5) 文章中の D られ と同じ意味・用法のものを次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 春の息吹が感じられる。　**イ** ほめられて恥ずかしかった。
ウ あの人だけは信じられる。　**エ** 先生が描かれた絵を見る。

(6) この文章で述べられている筆者の意見として**ふさわしくないもの**を次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 自然忘却の装置を働かせないようにして、小さなことまで忘れずにいると、大局を見失うことはない。
イ 人間は日常生活を送るうえで必要な情報だけを記憶し、不要なものは早く忘れたほうがよい。
ウ コンピュータが登場した現代でも、いまだに記憶力の優秀さが評価されるのはおかしなことだ。
エ すべての情報を記憶するという働きは、コンピュータに任せてもよい仕事である。

文脈把握・語句
内容理解・文法

2 次の文章を読み、あとの(1)～(8)の問いに答えよ。

小さい虫類を愛した(注1)尾星は、毎夏軽井沢で、いろいろの種類の虫の声を楽しんでいた。軽井沢のきりぎりす、すいっちょ、追分のくさひばり、松井田のたくましい茶色っぽいきりぎりす、入山のこおろぎなどの籠を、古い(注2)経机の上に積み重ねていた。

夜になると、私などには聞き分けられない好きな虫の籠を二つ選び出して、枕元に並べる。それは夜の A 父の空想世界に連なっている。それは単なる風流心というようなものでなくて、更に生活に密着している、尾星の文学の中のひとつの(注3)点景であったと思う。〈a〉

私が女学生であった頃、仲よし五人とクリスマスに交換した贈り物のなかで、朱塗りの小箱があった。だが、その小箱は何時か私の手元から消えていってしまっていた。そして私も小箱のことを忘れていた。ある夏、小物類の並んでいる棚に、朱塗りの小箱がほかの古い木箱の中で鮮やかにあるのを見つけた。思いがけない思いが、私はした。尾星はその時お風呂にはいっていた。私はそっと蓋を開けた。白い脱脂綿の敷かれた中に、五匹のこおろぎのミイラが、きちんと並んでいた。どれも足一本、鬚一本折れてはおらず、完全な形をしていた。私は尾星の小さい秘密を見たと思った。秋ちかくなって夏のつとめを終えたこおろぎを、毎日日光にあてて完全なミイラにするまでに、どれほど細心の注意と神経、小さいものの失われた生命を大切にするか、その時の尾星の気持ちを考えた時、B 私は、このこおろぎ達も父の文学作品のひとつであると思った。〈b〉

母が元気でいた頃、夏の夜、母は大きな声で私を呼んだ。押入れの襖に、一匹の蝉が、今、からからはい出て生まれる C 、瞬間であった。何故その蝉は、家の中の襖などに止まって、脱皮しようとしているのか。不思議でならなかった。私と母は D をころしてじっと見ていた。このようなものを実際に、目で見られることすら珍しいことであった。うすい白っぽい緑色の羽は、空気にあたると、すぐにうす茶色に変化していった。余りにこまかいことは、私は忘れてしまったが、その美しさと生まれて来る瞬間が、表現しがたいほどの素晴らしさであったことだけは、よく覚えている。そして立派に脱皮した大きい蝉を、庭の杏の木にそっと止まらせてやった。私は襖にじっと止まっている蝉のぬけ殻を、眺めていた。それは実に E ものとして、目に映った。たった今まで大事な役目をしていながら、脱皮が終わると同時に、それは無用のものとなるのである。私はそっとつまんでみた。だが、ぬけ殻は襖の織り目にしっかりとつかまっていて、容易にはとれなかった。役目は終わったものの、まだぬけ殻は蝉を抱いていると同じ状態であった。私はセルロイドのすき透った箱に、綿を

敷いてそっといれた。[F]そして次の日から、私の庭掃除の態度は変わった。今までにも蝉のぬけ殻は、いくつもあったが、ごみと一緒にはき捨ててしまっていた。だが、あの茶の間の襖でのぬけ殻を見てからは、私は注意して庭中のぬけ殻を集めてみた。椎(しい)の木の幹についているものもみつけた。落葉と一緒に箒(ほうき)の先についているものもあった。九月の末までの間に、私は八個のぬけ殻を庭から拾うことが出来た。それはやはりどれも［G］完全な形をしていた。〈c〉

屋星が帰京した次の日、私は、

「夏中の私からのおみやげよ」

と言って、セルロイドの箱を渡した。屋星は一瞬[H]はっとしたような表情をしたが、

「君はあのこおろぎの小箱をみたのだな」

と言った。こおろぎのミイラと同じに、蝉のぬけ殻をも、屋星は自分のおもちゃとしてくれた。今でもナフタリン[注4]一個と共に、屋星の写真の前に飾ってある。〈d〉

屋星は、君がこのようなものに興味を持ったということは、一歩の進歩だし、面白いことだ、と言った。冗談を言いながらも、[I]見すごしてしまえばそれまでの、小さいぬけ殻に注意をはらって集めた、そのことだけを、屋星はほめてくれたのであった。

（室生朝子(むろうあさこ)「父屋星の贈りもの」による）

（注1）屋星＝室生屋星。金沢(かなざわ)市出身の詩人、小説家。
（注2）経机＝お経をのせておく机。
（注3）点景＝ここでは、趣を出すために添えられたものという意味。
（注4）ナフタリン＝防虫用の薬品。

(1) 文章中の［A］・［C］・［E］・［G］に入ることばの組み合わせとして最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　A＝不思議な　C＝満足な　E＝様々な　G＝厳粛な
イ　A＝満足な　C＝様々な　E＝厳粛な　G＝不思議な
ウ　A＝様々な　C＝厳粛な　E＝不思議な　G＝満足な
エ　A＝厳粛な　C＝不思議な　E＝満足な　G＝様々な

(2) 文章中に[B]私は、このこおろぎ達も父の文学作品のひとつであると思ったとあるが、筆者がそう思ったのは、父にとって「こおろぎ達」がどのようなものだと感じたからか。「**生活**」「**空想世界**」という二語を用いて、「……もの。」という形で、**二十字以上、二十五字以内**（句読点も字数に数える）で書け。

(3) 文章中の［D］に入る最も適当なことばを、**漢字一字**で書け。

(4) 文章中に[F]そして次の日から、私の庭掃除の態度は変わったとあるが、それはなぜか。その理由として**ふさわしくないもの**を次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　蝉の脱皮の瞬間を初めて目撃したことで、生命の尊さを実感したから。
イ　蝉の脱皮の瞬間を初めて目撃したことで、ぬけ殻に対するあわれみを感じたから。
ウ　蝉の脱皮の瞬間を見守るうちに、その美しさと素晴らしさに感動したから。
エ　蝉の脱皮の瞬間を見守るうちに、小さいものに対する父の愛情が理解できたから。

(5) 文章中の[H]はっと と同じ品詞が用いられている文を次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　日がさんさんと照っている。　イ　弟は「ただいま」と言った。
ウ　父は本を読むと笑い出した。　エ　すると、彼は走り出した。

(6) 文章中に[I]見すごしてしまえばそれまでの、……屋星はほめてくれたのであった とあるが、それはなぜか。その理由をまとめた次の文の［　　］に入ることばを、文章中から**十八字**で探し、**はじめ**と**終わり**の**三字**を抜き出して書け。

> 父である屋星は、娘の行動に、自分が抱いている［　　］気持ちと通じるものを感じたから。

(7) この文章全体を三つの場面に分けるとすると、二つ目の場面はどこからどこまでか。最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　〈a〉のあとから〈b〉まで　イ　〈b〉のあとから〈c〉まで
ウ　〈a〉のあとから〈d〉まで　エ　〈c〉のあとから〈d〉まで

(8) この文章の内容として最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　小さい生き物にまつわる体験を題材にとりあげ、父と娘の間で行き違う感情の行方を描いている。

イ　小さい生き物に対する親子のそれぞれの関わり方を描きながら、父と娘の違いを印象的に描いている。
ウ　小さい生き物についての発見を描きながら、父から教えを学びとろうとする娘の姿を表現している。
エ　小さい生き物に関する父と娘のそれぞれの行動を並べながら、親子の間に通い合う思いを表現している。

内容理解　古典　**3**

次の文章を読み、あとの(1)～(5)の問いに答えよ。

ある年、(注1)疫病はやりて、諸人悩みけるまま、家々に(注2)山伏を頼み、疫病よけの(注3)祈禱をして、(注4)札守りをもらひ、(注5)門々に張りて、疫神を防ぎけり。それをA さるしはき男、うらやましく思ひけれど、もとより祈禱を頼まば礼銀やら(注6)ではすむまいが、守りは欲しし礼銀は惜しし。B いかがせんと案じけるが、(注7)所詮、人の門に(注8)をしたる守りを盗み取り、我が家に張りても同じことならんと、その夜、ひそかに人の家にをしてある札をめくり取り、我が戸に張りておきたりしに、その明くる朝、隣の人、ふとかの戸を見れば、(注9)「貸店あり」と、張り紙してあり。不思議に思ひ、急ぎ亭主をたたき起こし、「あまりこなたが朝寝坊するゆゑ、C さだめて子どものいたづらならん。戸に(注10)書き付けをしておいたわ」と言へば、亭主あくびをしながら、「それは我らが張りたる疫病の守りぢや」と言ふ。「いやいや、守りならば、貸店と書くはずはあるまい」と、ひきまくりて見せれば、D かの男肝をつぶしながら、(注12)抜からぬ顔にて、「いやいや、それにはこころがある。疫神がこれを見たらば、この家には［E］がないと思ひ、入るまいとて、わざと、貸店ありと書きました」と。

（「軽口福徳利」による）

（注1）疫病＝流行病。病をもたらす疫神がその家に入るのを防げば、病にかからないと信じられていた。
（注2）山伏＝山野で修行する僧。
（注3）祈禱＝神仏に祈ること。
（注4）札守り＝神仏の霊がこもるお守りの札。
（注5）門々に＝家の入り口ごとに。
（注6）やらではすむまいが＝払わないわけにはいかないが。
（注7）所詮＝結局のところ。
（注8）をしたる＝張ってある。
（注9）貸店＝貸家。家の戸口に「貸店」の張り紙をすることで、借り手をさがした。
（注10）こなたが＝あなたが。
（注11）書き付けをしておいたわ＝いたずら書きが張ってあったよ。
（注12）抜からぬ顔にて＝平気な顔をして。

(1)　文章中に A さるしはき男、うらやましく思ひけれど とあるが、「さるしはき男（あるけちな男）」はどのようなことを「うらやましく」思ったのか。最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。
ア　山伏に呼ばれて祈禱を受け、お札をもらうこと。
イ　山伏を呼んで祈禱をしてもらい、家にお札を張ること。
ウ　山伏に祈禱をしてもらえば、お札を張る必要がないこと。
エ　山伏に祈禱をしてもらうか、家にお札を張るか選べること。

(2)　文章中に B いかがせんと案じける とあるが、思案した結果、「さるしはき男」はどのような行動をとったのか。それがわかる部分を文章中から**三十五字以上、四十字以内**で探し、**はじめ**と**終わり**の**三字**（句読点も字数に数える）を抜き出して書け。

(3)　文章中に C さだめて子どものいたづらならん とあるが、この人はなぜ「子どものいたづら」だと思ったのか。それを説明した次の文の［a］～［c］に入ることばの組み合わせとして最も適当なものをあとのア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

家の戸に、［a］からもらった［b］ではなく、［c］という紙が張られていたから。

ア　a＝疫神　b＝祈禱　c＝札守り
イ　a＝山伏　b＝札守り　c＝「貸店あり」
ウ　a＝山伏　b＝祈禱　c＝札守り
エ　a＝疫神　b＝札守り　c＝「貸店あり」

(4)　文章中の D かの男 とは、だれのことか。文章中から**六字**で抜き出して書け。

(5)　文章中の［E］に入ることばとして最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。
ア　主　イ　山伏　ウ　礼銀　エ　疫病